

ショートコメント vol.160 (2019年12月20日)

テーマ：全国の訪日客数は2か月連続で前年割れ
 ～ただし、悪い動きの中に一つの良い材料も～

●11月の訪日客数の推移

観光庁が発表した19年11月の訪日客数(全国)は、前年比で0.4%減と2か月連続の減少となった(図表1)。韓国入客が前年比で65.1%減となったことが主因であり、それ以外の国の訪日客は堅調に推移したものの、全体としては前年を下回る結果となった。

これで2か月連続の減少となったわけであるが、インバウンド市場の趨勢については、現時点では判断が分かれよう。少なくとも、前月の5.5%減よりもマイナス幅は縮小している点から、今月の結果をもって、前年割れのトレンドが確定したとはいえない。

●中国人客の増勢の回復

さらにいえば、今月は一つの良い材料が確認できた点で、決して悪い結果ではなかったともいえよう。これについては、前月の動きに話を戻さねばならない。

前月の10月については、全体で5.5%減という厳しい結果であった。加えて、個別の動きをみると、韓国入客が大幅に減少しただけでなく、中国人客の増勢も一気に鈍化する形となった。10月といえば、中国の国慶節にあたるが、直近5か月の前年比13～26%の増加ペースが一転し、2.1%のプラスにとどまった。

中国人客の鈍化は市場全体に大きな変化をもたらすため、これが一時的な減少か否かに注目が集まっていたが、11月は21.7%増と、再び2ケタ増のペースに戻っている(図表2)。

●インバウンド消費の推移

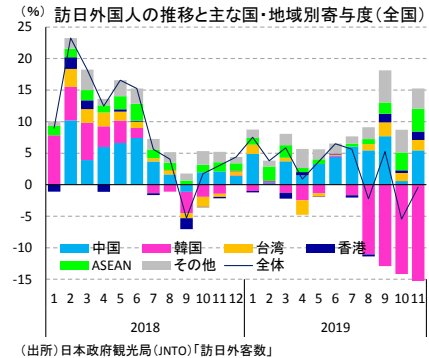
今回の中国人客の回復がもたらす意味は非常に大きい。

インバウンド市場は、その推移を人数ベースと消費額ベースによって測られるが、消費額ベースの推移を支えているのが中国人客である。

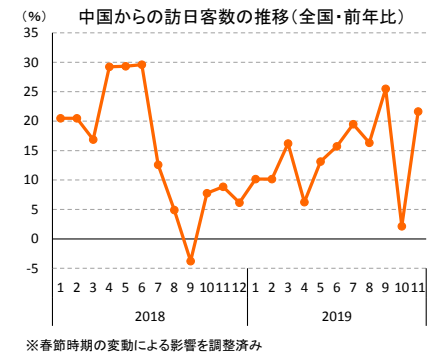
2018年の実績では、中国人客の1人当たり平均消費額が22.5万円と、韓国入客(7.8万円)はもちろん、インバウンド全体の平均額(15.3万円)も大きく上回る。その結果、中国人客の増減はインバウンド消費全体を左右する形となっている。

現に、中国人客の動きが戻ったこともあり、直近10-11月のインバウンド消費は前年を2.0%上回ったと推定される(図表3)。一方、同じ期間で人数ベースの動きをみると、3.0%の前年割れである。

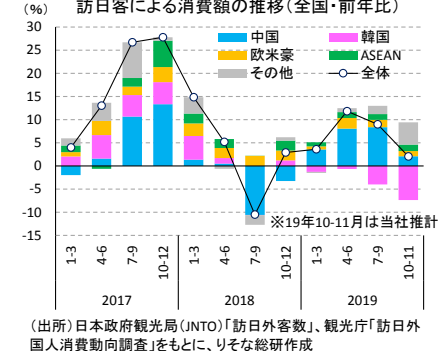
【図表1】



【図表2】



【図表3】



※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点のものであり、今後予告なしに変更されることがあります。

●今後の注目点

結果として、11月の中国人客の動きにより、次のような可能性が出てきたとみられる。

少し楽観的な見方かもしれないが、中国経済が予想以上に悪化しなければ、しばらくは中国人客の一定の増加が見込める形となってきた。それに伴い、インバウンド全体の消費額も、前年を上回る推移が期待できそうである。

これは景気の観点からも、非常に大きな意味をもつ。足元は消費増税によって個人消費が減速しているが、インバウンド消費まで減少する事態は避けられるからである。

とはいえ、まったく予断は許されない。今の中国経済の厳しい状況と、日本への観光客の増加という動きは、客観的にみて辻褄が合わないからである。前月のように、急に失速する可能性もあるため、今後も中国人客の動向には十分な注意が必要とみられる。

本件照会先：大阪本社 荒木秀之
TEL:070-6633-0038 mail:hd-araki@rri.co.jp

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点のものであり、今後予告なしに変更されることがあります。